

「インド学」 中谷 英明

上山 中谷さんは、「古典学の再構築」というテーマを掲げた巨大な共同研究を主催されていますね。この5年間ものすごく忙しかったと思います。

それは現代的な問題にかかわるテーマをご自身が持っておられて、それを掘り下げる過程でこういう大プロジェクトが不可欠であるとお感じになることがあったのだと思います。そういうことがないと、こんな厄介なことは普通の研究者はなかなか手掛けない。手掛けても途中で挫折したりなんかすると思うのですが、見事にまとめてやり遂げられた。私は人文科学の将来の展開のためにも、非常にいい糸口を与えてくださったと思うのです。

その時にあくまでもご自分の専門の研究が軸になっている。それが共同研究の中でも、多くの人々によって一緒に担われるというかたちに展開されてきた面が多いかと思うのです。

この共同研究の間にずっと出されてきたニュースレターに、私の対談のシリーズを設けていただいたその締めとして、今日はかなり欲張った質問ですけど、まずご自分の個人的な専門的研究の今までの狙いと、それを実現するための手立てと成果についてお話しただいて、それから大きなプロジェクトのことも触れたいと思います。ご専門から話をしていただけますでしょうか。

●サンスクリットと仏教と

中谷 私は1966年に京大に入学して、仏教学を専攻しました。指導教官は長尾雅人先生でした。

上山 長尾先生はサンスクリットとなじんだ新しいタイプの仏教学者ですから、いや、新しいとも言えないのか(笑)。

中谷 いえ、21世紀となって20世紀の日本の仏教学を振り返ると、やはり長尾先生は飛び抜けた仏教学者であったと・・・。

上山 そうですか。それはうれしい。僕は学問を知ら

ないでお人柄が好きなんです。長いこと親しくしていただいて。あなたがシルヴァン・レヴィさんのことについてお書きになりましたけれども、日本のシルヴァン・レヴィという役割をしたと言える面があるのでしょうか。

中谷 サンスクリット原典を漢訳、チベット訳と対照して読むというのはまさにレヴィ学ですね。原典を正確に読まれただけでなく、それを明晰な日本語になさった。両方とも大変な功績だと思います。

上山 読みやすいですね。ただ長尾先生以前の仏教学ですと、なかなか実証的な世界へ展開していくのは難しかったと思うのですが、そういう意味では、仏教学をおやりになった時期が良かったのですか。

中谷 あの頃、仏教、印哲、梵文という3講座がインド学という一つの研究室を作っていて、これは当時の哲史文という区分からすると異例な在り方です。

上山 そうですね。そういう意味では、中谷さんの仏教学研究は、そういう雰囲気糸口を与えられた点があったわけですか。

中谷 はい、サンスクリットから入ったことが大きかったように思います。伝統的な仏教学というのが日本には・・・。

上山 身近に何か鬱蒼と、うようよと言ったらいいか。

中谷 ですから、先ずサンスクリットを読む、それから仏典を読むという順にやらせてもらったことが有り難かったです。

上山 あなたが初めに、大地原^{おが}豊さんと一緒にやった仕事がありましたね。

中谷 はい、『ダルマ・サムツチャヤ』です。

上山 それは「私はサンスクリットから入った」ということの一つになるわけですか。

中谷 はい。これは大地原先生との共同研究として20年近く続きました。先生のライフワークは『カーシカー・ヴリッティ』というパーニニ文法に対する注釈書の研究で、最初、ルイ・ルヌーというパリ大学の教授に師事されたのですが、途中からは立場が逆転してしまって・・・

上山 大変それはうれしかったらしくて、ご本人から何度も聞きました。

中谷 ルヌー先生から大地原先生にあてた170通ほどの手紙が残っていて、先生の奥様と私の手元にコピーを保管しています。オリジナルは1991年パリで日仏シンポジウムが開かれました時、大地原先生の遺言に従ってコレージュ・ド・フランスに寄贈する儀式をやりました。

上山 そうですか。

中谷 大地原先生は自分の生涯を自分できっちり決めておられた方で・・・

上山 決め過ぎたんですね（笑）。

中谷 前半は研究、後半は教育と分けられました。

上山 どこが前半と後半の分かれ目ですか。

中谷 私たちが入る直前です。

上山 あなたと共同の著作は、あれはやめたあとの仕事ですか。

中谷 そうです。『ダルマ・サムッチャヤ』にはルヌーさんの名が編集協力者として挙がっているからおっしゃって、ルヌー先生への追慕から。

上山 あなたがいくつの時にあれは出たのですか。

●『ダルマ・サムッチャヤ』の共同研究

中谷 四回生の夏休み、大学が紛争で封鎖されたまま、まだ卒論のテーマも決められずに北白川の下宿で本を読んでいました時に、玄関で人の声がしたと思ったら、「この部屋は暑いねえ」といきなり大地原先生が入って来られまして、手にしておられたのがフランスから届いたばかりの『ダルマ・サムッチャヤ』の第1巻でした。

上山 大地原さんのご指名。大地原さん自身は、「仏教のサンスクリットは崩れていて」とけなしていましたけれども。

中谷 『ダルマ・サムッチャヤ』の写本は、シルヴァン・レヴィがネパールで発見してパリへ持ち帰ったものですけれども、13、4世紀のもの複製ですから、4、5世紀に作られてから千年も経っている。そのため、もともとサンスクリット詩としてそれなりの出来栄えだったものが、書き写すうちに凡庸な読みに変えられている。大地原先生はそれを丹念に原型に復する作業に熱中されて、「頭の体操」と称しておられたのです。

毎週金曜日、京大に非常勤講師として呼んでいただいて授業をして、その後は『ダルマ・サムッチャヤ』

で午後いっぱい過ごすということ、私がパリにいました7年間の中断期間を除いて12、3年間やりました。先生は文法や語彙だけでなく、インド学史の細かなエピソードなど、あらゆる知識を披露くださって本当にいい勉強になったと思っています。

上山 それはさっきおっしゃった「サンスクリットから」ということの中身ですね。それで、それはできあがったわけですか。

中谷 はい。1991年の冬、大地原先生が亡くなられる2週間ほど前に最後の章の校正刷りがローザンヌから届いて、校正を終えられた直後にお亡くなりになりました。「もう心残りはない」と。

●ブッダの言葉 —法句経と『スッタニパータ』

上山 そうですか。それでどういう糸口で仏教の原形を探るようになったわけですか。

中谷 膨大な仏典のいったいどれがブッダ自身の言葉なのか・・・

上山 仏典というと、大正新脩大藏經みたいなものが、僕らはすぐ頭に浮かぶのですが、幅が広くて分量も多いですね。

中谷 キリスト教にしろイスラムにしろ、カノンは1冊に収まりますが、仏典はブッダが亡くなってから千年間くらい絶え間なく増え続けて一棚に納まらないほどにもなった。聖典というものの考え方が根本的に違っています。

上山 お釈迦さんの言行を伝えたものでないと確認されているものがやたらとありますでしょう。それで原始仏典に焦点を当てられたのは・・・

中谷 ブッダの本当の言葉を見つけ出すこと。今はそう単純には考えませんが、当時はそれが他のことより遥かに重要だと思えたのです。まず法句経から手を付けました。法句経の説一切有部版の『ウダーナ・ヴァルガ』のサンスクリット本がちょうど出版されましたので、それを修論の対象としたのですが、そのなかの最古の写本がパリ国立図書館に眠っていることに気付いて、パリ大学に留学して、それを校訂してパリから出版しました。

上山 それがスバシ写本ですか。

中谷 はい。スバシというのはペリオがその木簡を発見した遺跡の今の地名で、鳩摩羅什の母堂が羅什の懐胎を告げられた致隸藍という由緒ある寺です。今はほとんど原形を留めませんが。

上山 では、まず法句経から入られたわけですね。

中谷 はい。仏教は、紀元前4, 5世紀にガンジス平原の東の端で生まれたのですが、説かれた言葉は東インドの話し言葉に近い中期インド語でした。当時の聖典用語であり、バラモンの占有物でもあったサンスクリットではなかったわけです。そして紀元前3世紀のアショーカ王のころから南インドや西インド、北はガンダーラ辺りまで徐々に広がっていくわけですが、そうすると方言が違いますから、いわば京言葉を東京や九州の言葉に直すことが行われました。

スバシ写本は特異な写本で、大変不規則なサンスクリットを用いています。その不規則さは、スバシ写本が元にした伝承が北西インドの中期インド語、つまりガンダーラ語であって、それからサンスクリット化されたためと推測できます。これは偶然ではなくて、紀元後1, 2世紀から仏教はガンダーラを経て中国へ入ってくるわけです。

上山 そうですね。

中谷 中国へ最初に入ってきた仏教は、いったんガンダーラに腰を下ろした仏教で、3, 4世紀のころまでの漢訳仏典の大部分は原語がガンダーラ語だったろうと推測されます。例えば「沙門」とか「和尚」とかいう言葉は、音韻的にガンダーラ語とぴったり合うかたちをしています。そういう流れの中にスバシ写本も位置付けられる。

上山 仏典の翻訳のプロセスにガンダーラ語が占める比重が確認されたのはいつごろからですか。

中谷 1962年、ロンドン大学のジョン・ブラフ教授が「ガンダーラ語ダルマパダ」を出版されて、ガンダーラ語の詳細が明らかになって急に進みました。

上山 最近ですね。あなたがスバシをやられたのとあまり離れていない。

中谷 これは次の世代に託したいと思っていますけれども、漢訳仏典の中に多数埋もれているガンダーラ語からの音写語の研究が残されています。これをやるには、中期インド語と漢字音の知識が要りますからたいへんですが、仏典研究には非常に重要だと思います。

上山 特に漢訳仏典の恩恵を被っている日本にとっては重要度が高いと。

中谷 そうですね。先ず中期インド語の音韻史の一般特徴を知っておく必要があります。

上山 それはある程度たどれるのですか。

中谷 アショーカ王碑文以来、かなりよく辿ることができます。インド語には調音部位の口腔中央部への移行傾向とか、数千年間、一貫する変化があります。例えば、ヨーロッパにいるジブシーたちが話しているのが、紀元千年ころの中期インド語から別れた言葉だと

いうことも、音韻からわかります。

上山 そうなんですか。

中谷 サンスクリットの「タスヤ」(彼の)が「レース」となるというようにすっかり変わっているのですが、体系としてきっちり対応します。その音韻体系を中期インド語の流れに位置付けると紀元千年ぐらい。彼らはそのころインドを出て行ったと推定されます。

上山 音韻対応が非常に役に立つジャンルですね。

中谷 はい。彼らはインドの文献ではローマと言われて、三つのことを生業と言われます。籠作り、歌と踊り、それから盗み(笑)。盗みはともかく、チゴイネル・ワイゼンとかフラメンコとか鍋つくりとか、今も伝統が生きているようです。

上山 法句経からスタートした話だったのですが。

中谷 スバシ写本を見終わりましたら、法句経の伝承史がはっきりしました。一番古いものは、2世紀のガンダーラ語の「ウダーナ・ヴァルガ」断片と「ガンダーラ語ダルマパダ」で、法句経はそういう古い時代からずっと五つか六つの部派の伝承として変遷の跡を迎えます。ですから論書や大乘経典の中で引用されている法句経の詩節が見つかりましたら、その年代や、部派所属が確定される可能性が高いわけです。そういう法句経詩節の伝承史を確認しました。

上山 それはいつごろ確認できたのですか。

中谷 スバシ写本の研究を終えたのが1978年ですから、おおまかな輪郭はそのころつかむことができました。1989年の「スバシ写本の研究」に概略は書き込んでいますが、詳細は未だ・・・。

上山 そうですか。それは客観的な証拠の期待できるテクノロジーですね。手掛かりとしては音韻ですか。

中谷 はい、音韻・語形・韻律等の言語事象と内容の微妙な変化です。

上山 若い人にとっては魅力的であろうと思うけれども、それはコンピューターを使う必要があるのですか。

中谷 当時はコンピューターを知りませんでした。あれば随分楽だったと思いますが。

上山 コンピューターになじむわけですか。

中谷 データベースのおかげで、半年かかった韻律分析の仕事が10分でできるようになっていますから。そうやって一連の流れをつかんだうえで内容を分析してみましたら、法句経はよく教理的な整理が行き届いたものであることが分かりました。いっぽう「スッタニパータ」はそうではない。体系化を経っていない生の伝承という印象を強く持ちました。

上山 どんなくあいに法句経と違いますか。

中谷 「スッタニパータ」の中でも4章, 5章, とり

わけ4章が格段に古いかたちを保っている。ブッダから直接聞いた人、あるいはブッダ自身が詩にまとめたのではないかと思われるくらいに記述が生き生きして、しかも意味が深いのです。

●プラトンと「スッタニパータ」

上山 仏典の原形みたいな「スッタニパータ」の4章、5章という辺りから受ける印象と、例えばプラトンなどから受ける印象の一致点と相違点がありますでしょうか。

中谷 このプロジェクトは大変勉強になりました。とりわけプラトンについて内山先生らからたくさん教えていただきました。プラトンは「アイデアを知らなくてはいけない」と言いますが、そのアイデアは善によって裏打ちされる非常に倫理的なものです。この点は仏教と似ている点です。仏教も温和で害心がない、快樂に溺れず、よく反省して高慢でないことなどを強調します。

それからプラトンは「アイデアを思惟によって知る」と言います。

上山 エピステーメーですね。

中谷 エピステーメーは、論理的思考に限らない、直感的なものだそうですが、言葉がその中で大きな比重を占めていることは事実のようです。それに対して、仏典では、言葉による認識に対する強い不信感が表わされていて、「人間は潜在欲望に突き動かされて、言葉によって自分の見方、見解を作りあげてしまう。そういう人間の在り方を自覚しなさい」と言います。

しかもそれはいっぺん知ればすむものではなくて、繰り返し反省して知るべきで、それほど潜在欲望は強い。したがってブッダは、そのような自覚と、それに基づく心の平安は、単に思惟によるのではなく、修行によって得られると言っています。孤独な遊行の生活、朝、村へ托鉢に出かけて、食事のあとは静寂所での瞑想という、非常にシンプルでしかも自然の中にいる生活をして、その生活によって初めて真理の世界、悟りの世界、心の平安が開けてくる……。

上山 欲望の激流を渡るとか、何度も出てきますね。

中谷 はい。するとプラトンとブッダの違いは、真理を知るのに「知」によるか、「行」によるかである、と一件落着きそうですが、驚いたことに、プラトンもアイデアを知ることは、カタルシスすなわち魂の浄化によって魂を欲望、情念から遠ざけることによって実現する、しかも時間と労苦をかけ、厳しい教育を通じて

初めてできることであると言っています。凡人が一生かけても到達できるかどうかというくらい難しいらしい。こうなりましたら、二人の述べていることはうんと接近してきます。

違いは、一つは先の言葉に対する態度です。プラトンも知識を固定した体系として言葉で表すことができるとは考えてはいないけれども、対話など、言葉を通じて真理の中へ入って行くことをすすめています。それからまた、アカデメイアの生活と遊行の生活を比較した場合には、プラトンは数学を重視したのに対して、ブッダは自然の中での修行を重視したと言えるかも知れません。

今の世の中では、都会の人口空間と情報のヴァーチャル世界の中で、人間の精神がどうもひ弱になっているようで、ブッダの説く遊行とは言わないまでも、もっと自然に密着する生活をしないと精神の活力が枯渇するのではないかという気がします。

●ウパニシャッドと「スッタニパータ」

上山 バラモンの生活の仕方として、ある一定の年齢を過ぎると流浪に出るのがありますね。あれも解脱を求めて、世の中の余計者として生活するわけですが、ブッダの遊行というのはそれとどう違うのでしょうか。

中谷 世捨て人、サンニアーシンと言いますけれど、そういう在り方が、例えば「マヌ法典」の中に見られるような……

上山 あれはマヌにあるの？

中谷 はい。四住期というかたちで整理されて人生の最終段階とされるのはずっとあとの話で、およそ紀元前後だと思います。萌芽は最古のウパニシャッドにあって、仏教の一番古い考えとウパニシャッドの古層の考えとは極めて近いのですけれど。

上山 時期的にはどうですか。

中谷 ウパニシャッドのほうが少し先行すると思われる。バラモンが祭式を行う。その祭式によって死後天界に再生することが保証される。そういう祭式思想に対して、ブラーフマナ末期から疑いが生じてきた。祭式実行だけでは永遠の至福は保証されない。まず祭主の信仰が問題になってきます。死ぬときに、「自分は天界に生まれる」という固い決意を持っていないと駄目。次に荒野での苦行や欲望の放棄などが必要とされてきます。ウパニシャッドの時代にはそういう苦行者たちがたくさん出てきて、ブッダもその1人だったと言われているわけです。

従って、『ブリハッドアーラニヤカ・ウパニシャッド』と言う、一番古いウパニシャッドにあることと、『スッタニパータ』に説かれていることはほとんど重なってしまいます。何が違うかといったら、仏教では祭式を認めないことです。

上山 遊行の中身はどのようなのでしょうか。

中谷 仏典の中にはさまざまな苦行を行なう仏教以外の修行者たちが描写されていますが、それはブッダより数世紀後に書かれた文献ですから、実際のところはわかりません。ブッダが極端な苦行を認めなかった他は、そう違わなかったのではないのでしょうか。ただ、仏教はすぐに僧伽（サンガ）を組織して、集団で修行生活をしはじめます。

上山 それがないと戒律は出てこないでしょうね。あれはいわば集団生活の規則ですからね。ところで『スッタニパータ』では、ものを所有してはいけないということを厳しく言っておりますけれども、あれは……

中谷 ウパニシャッドでも同じことを言っています。息子、財産、世界に対する欲求を放棄すると。

上山 そこで区別はつかないわけですね。それは面白いですね。やはり根っこは伝統の中に入っているということですね。

中谷 そのとおりです。

●デカルトと『スッタニパータ』

上山 『スッタニパータ』の916という詩に、「《私は考える》という、妄想創出の根源をすべて断ち切りなさい。」とありますが、この「私は考える」というのは、どういう言葉か知りたいのです。

中谷 原文は「マンター・アスミ」です。

上山 そうすると、コギト・エルゴ・スムに近いのではないかということなのですが。

中谷 あっ、なるほど。

上山 デカルトはそれを支点にして体系を展開していくのだけれども。

中谷 ブッダは、「渴き」つまり潜在欲望に支配された「私は思う」ということを止めなさいと。

上山 デカルトは、コギト・エルゴ・スムを出発点として体系を組み立てようとしたわけですね。それをやめておけということですか。

中谷 まさにその通りです。

上山 これは大変なことですよ。デカルトは「方法序説」で「我と神」を出してきて、存在全体の構築をするわけですからね。あなたがやっておられることは、

仏教文化というジャングルの透視写真を撮っているようなもので、原形まで客観的に見定めることができる。あなたは、仏教という大ジャングルを安心したかたちで客観的にとらえられる手掛かりを提供していると僕は思うのです。そういう意味では、大きな文化的な役割を持っていると思うのです。今のようになんかいろいろなものと対比していく母体、探索のシステムができるわけですね。

●仏教学の現状と展望

上山 中谷さんは原始仏典の姿をとらえ直すために言語学的な問題点を整理したり、そこから発見したりされてきたわけですね。更にコンピューターという手段が入ってきてからは、それになじませるための努力がされた。膨大な時間を使うことばかりで力の配分が大変難しいと思うのですけれども、そういう点はどのようにされているわけですか。

中谷 インド学の現状を申しますと、主要な古典文献はほぼデータベース化されました。もちろん欲を言えば注釈とか、まだ入っていないテキストもあるわけですが……

上山 主としてどういうものですか。

中谷 『リグベータ』からブラーフマナ、ウパニシャッドはもちろん、徳永さんの「マハーバーラタ」と「ラーマ・ヤーナ」、あるいはダルマ文献、カーリダーサの戯曲を始めとする文学作品、仏典のほうもパーリ仏典、漢訳仏典はほとんど入っています。

上山 チベットはどうですか。

中谷 アメリカに本部がある団体がチベット仏典のデータベース化を継続してしまっていて、かなり入っています。ボン教はまだ新しい文献が出てきている段階で、これからというところでしょうか。けれども自分が使えるデータベースはほぼ揃ったと感じています。

上山 それは最近、何年間ぐらいの間に。

中谷 およそ10年です。

上山 そうですか。仏教研究のうえでそれは大きな出来事でしょうね。

中谷 コンピューターの性能も飛躍的に向上して、今日持って来ていますこの小さなコンピューターに、いま言ったテキストがすべて入っていますし、ペトリック・ロートの7巻本、モニエルウィリアムズ、クリティカル・パーリ・ディクショナリーとかの辞書類も全部入っています。

上山 すごいな。研究室を持って歩いているようなも

のですね。

中谷 本当にそうです。あとは研究あるのみですが、これがなかなか・・・。

上山 すごい時代になってきたな。仏典には漢訳仏典あり、チベット仏典もある、パーリもある、実に雑多なものがあるわけです。しかし一貫して仏教の根本にあるもの、つまり根本仏教の姿をより正確に描きやすくなっているのではないのでしょうか。原始仏典の研究は実際にあるものを探す方向だと思うのです。根本仏教はそうではないですね。構築する。現代のテクノロジーとかデータを使って、それを構築する。そういうことは新たな次元で起こりやすい状態にあると思います。それはまだ視野に入れてはおられませんか。

中谷 それは大きな仕事ですから、遥か先に見ておきたいと思ってはいますが・・・。

上山 こういう新しいテクノロジーになじんだ世代が問題提起をする責務があると僕は思うのですが。いわゆる大乘の展開まで視野に入れたかたちの、地域としてはインドから中国、日本、それから朝鮮半島とかベトナムとか広がりを持った仏教の、その根本仏教ですね。そういう関心はどこかに持っていらっしゃるわけでしょう。

中谷 耳の痛い話になりました。間もなく年が明けますから新春の初夢くらいに・・・

上山 とどめておきますか。(笑)

●古典学の再構築を振り返って

最後に、この「古典学の再構築」の大プロジェクトを今回5年間やってご覧になった感想と展望、それを一言付け加えていただいたらどうですか。

中谷 実際にやってみまして、いかにものを知らなかったかよくわかりました。参加した方も皆さん他の分野を知って大変面白かったと言って・・・。

上山 会う人ごとにそう言っていますね。

中谷 それがこのプロジェクトの最大の成果ではないのでしょうか。中間ヒアリングでは、研究の連携が具体的に見えていないという批判を受けたのですが、そういう意識変革の方が具体的な連携研究よりも大事なのではないかと。研究者がそうやって視野を広げる、方法論的な刺激を受ける、それはその人自身の研究を一回りも二回りも大きくしたのではないかと。これこそ今回のプロジェクトの最大の成果だと私は感じています。

これと関連して、古典研究の在り方を見直すべきだ

という自覚も生じてきました。日本の古典研究の特殊な在り方として、明治以降、ヨーロッパの学問を忠実に受け入れよう、追いつこう、という気持ちで研究がなされてきた。日本人の几帳面さがそこに表れていると思いますけれども、100年近くたって、しっかりと根付いた。

上山先生に「こんなに穂先がそろっていると思わなかった」と、このプロジェクトが発足した時に言っていた言葉が強く印象に残っているのですけれども、日本では古典学の主要分野はみな大変高い水準にある。これは他のどこの国にもないことで、それを横に連携させることができた。

上山 初めてでしょうね、これだけ大規模にやられたのは。

中谷 これだけの力を日本の古典研究が持つようになったのですから、ヨーロッパの後追いではなくて、こちらから発信できるものも多いはずだと思うのです。欧米の研究者には欧米に固有の見方がありますから、そういうものから自由な日本の研究者の視点をもっと大胆に出しているのではないかと、ということです。これは単に古典学だけの問題ではなくて、文化的多様性の尊重が言われる現代にあって・・・。

上山 価値の世界ですね。価値の世界における学問的な交流というか。

中谷 それが成り立つ状況になってきた。この9月にやりましたシンポジウムで、イスラエルから来られた方が・・・。

上山 何を話されたのですか。

中谷 「ユダヤ人の歴史は聖書の再解釈の歴史である」という話をしていただいたのですけれども、こういうプロジェクトをやる能力が日本にあるということに驚いた、そして、その大事さがよく分かったと。

上山 大学はどこですか。

中谷 ヘブライ大学です。最初は大変否定的だったのですが。聖書もクラシックスではない、ギリシャ古典だけがクラシックスであると。

上山 それはえらい伝統的な。しかしそれが普通なのでしょね。

中谷 ヨーロッパではそれが常識でしょうが、われわれはそうではないのだと。いろいろな文明が持っている古典、それをみな同等のものとしてクラシックスとして研究対象にしたいのだと申しましたら・・・。

上山 本当にうたうべきでしょうね。そういう古典の把握の仕方は。

中谷 それはその通りだと強く言っていたいただいたので、われわれもやったかいたがあったと。

上山 「価値選択の場合に参照するに値する記録の体系」と僕は受け取っています。やはりそれは、ヨーロッパの人にとっては、ちょっとはずれた見方なのか。

中谷 そうですね、ヨーロッパの知識人の常識では、まだまだギリシャ古典と聖書が中心で、それ以外のもは考慮に値しない。

上山 日本は逆で、聖書とかギリシャ古典みたいな唯一のよりどころというものが無い。中国とかギリシャとか、幾つものものを大事にする態度があるわけですよ。

中谷 そういう伝統的な日本人の姿勢が今の世界に貴重なのではないかと。

上山 それは千年かけて作ってきた伝統でしょう。中国のものをまず古典として、それからヨーロッパのもの。まだイスラムまで届いていないだけであって、イスラムも入ってくる可能性がじゅうぶんあるわけです。そういうおらかな古典理解はこれから面白いかもしれません。価値の相対化というか。しかも単に相対化するのではなくて、それぞれの評価までできると面白いですね。

さっきの仏教とプラトンの違いみたいな違いが至る所にあるのでしょうかね。両方ともいいことを言っているのだけれども、ちょっと違う。それがあまり偏見なしに、弁護したり反発したりするかたちでなくて、認めていける土台が日本のカルチャーにあると思います。

●古典の再解釈から新しい価値観の構築へ

中谷 このプロジェクトの最後のところで思いましたのは、古典研究者は古典世界にとどまっているだけでよいのではなくて、古典はいつの時代にもその時代にふさわしい価値観を提供してきたのだから、激変する現代において古典をどう再解釈するか、それを提供する責務もあるのではないかと、ということです。そのためには今の世界がどうなっているのか、民主主義や国際金融資本のあり方や、貧困や紛争の実情や、物理学、生命科学、脳科学、精神医学などの先端科学の成果など、それらをよく知った上で、21世紀にふさわしい新しい価値観を考えていかなければならないのではないかと。

上山 そうですね。

中谷 日本はそのため大変いい位置にいるのではないかと気がします。

上山 どういう点でいい位置と言えますか。

中谷 まず第1に、先生が指摘されましたように、い

ろいろな文明の価値観を偏見なく取り入れて、かなり客観的に認識することができる。それを受容する媒体として穂先の揃った古典学がある。

上山 それはありますね。

中谷 もう一つは、日本の科学者は世界の第一線で先端を切り開いていっていますから、その科学者に見えてきている最新の世界を聞き出して、古典と付き合わせて、それを評価することができる。

現代は混迷の時代と言われて、戦争・紛争、地球環境、貧困など、大きな問題が山積しているのに価値観がどうも見えていないということになっています。今のような「無統治」状態では危なくてしょうがない、ということが世界の常識になってきているようです。もちろんそれは、さしあたっては政治の問題ですが、根本的には価値観の問題だと思います。

先生はこのプロジェクトが発足した時の基調講演で、ヤスパースの軸の時代のことをお話し下さいましたが、世界はそれ以来今まで2千年以上の間、その価値観でやってこられたのだと思います。今われわれの直面している大変化は、第2の軸の時代が来る予兆のようなもので、地球運命共同体を自覚した新しい価値観が出て来ないとはいけません。数十年かかるかもしれませんが、それぞれの文明はここでちょっと立ち止まって、固有の価値観をリニューアルする必要があるのではないのでしょうか。

この作業は国際的な連携の下で行なわれるべきだと思います。しかしそのイニシアティブを取ることでできる唯一の国が日本だと思うのです。日本が率先して日本の価値観を新しく構築して、世界に示すことができると思います。その価値観を世界に押し付けようというわけではありません。それぞれの文明が自ら再構築すべき時が来ているのではないのでしょうか。

上山 日本には昔から、よそで生まれたいいものを一歩引いて評価するというよい伝統がありますからね。

(2002年12月20日 上山邸(京都市太秦)にて)